

短歌を支えるもの

三沢左右

俳句に季語があるように、短歌という短い詩形にも、背後にはそれを支える何ものがあるのではないだろうか。

鈴木加成太『うすがみの銀河』は、実景の描写や実体験という印象がさほど強くない。

代わりに、作者の想像はさまざまな文学作品に飛躍し、短歌作品に奥行きを与える。

「菊花の約」^{ちぎり}の客膳に鯛は在りたるか播磨の加古のひと待つをとこ

蛍光の灯に銀粉を散らしつつエーミール
の蛾棲む停留所

一首目の「菊花の約」は『雨月物語』中の一編。作者は近世文学を専攻していたという。

二首目の「エーミール」は、国語の教科書で馴染み深いヘッセ『少年の日の思い出』の登場人物だ。歌集には『スーホの白い馬』なども登場する。こうした歌には、現在の自身を作り上げた青少年期の読書体験を率直に出しているような感覚があり、それは教養主義的というよりノスタルジーに近い。

せいねんを水死へ誘う眸^{まぶ}ほそき白馬のよ
うに春は来ている

歌集中いくたびが登場する「馬」は、現実というより象徴の馬だろう。この「馬」の姿に、私は塚本邦雄の〈馬を洗はば馬のたましひ互ゆるまで人恋はば人あやむるころろ〉を思い出した。

岡崎裕美子の二歌集『発芽』『わたくしが樹木であれば』が、一冊の文庫になって昨年刊行された。いわゆる「短歌らしさ」を前面に出すことなく、身体と性を歌い上げる即物的な歌風が小気味いい。

君といる夕餉^{ゆづ}しだいにつらくなる好きな
はずだがましてや鰻
ブルトップ開けてあげると喜んで子犬の
ように 好きでした、顔
逢いたくて九段まで来て広島男に弾か
せるわれのオルガン

『わたくしが樹木であれば』
第一歌集から引用した一首目、一見短歌らしくない結句が光る。どこかきこえないリズムながら、音数は定型を守り、オチに少しの笑いと寂しさを絶妙に織り交ぜて感傷を誘う。二首目は、平易な比喩で他者との関係を的確

に詠み上げる。三首目は第二歌集から引用した。二首目に比べると比喩の詩情は高まっているが、即物的なイメージは変わらない。

こうした歌風は一首に広がりを生むのが難しいようにも思われるが、岡崎は、自身を強く押し出した歌を他の歌に響かせることで広がりを生み出す。

流れるままにしておく汗の眩しさに球児
よそんなに砂を拾うな 『発芽』

負けたら何か持って帰れることにして二
人で映画を見た部屋があった

おそらくは向こうも雷雨会いたくて深夜
のバスを待つ春もあつた

これらは連続する三首だが、それぞれのイメージがゆるやかに次の歌の呼び水となる。

いま産めば父を産むかも ひそやかに検
査葉浸す六月の朝

『わたくしが樹木であれば』
父親の死が詠まれる第二歌集。引用歌では、作者を印象付けてきた〈性愛〉〈生殖〉といったテーマが大きく転回する。自身の身体を背景に、大きな感情の渦を作品に昇華する手際が見事だ。

作者によって切り口は異なるが、魅力的な歌集は、一首一首を支える大きなイメージを背後に潜めている。